
天使の火

鈴雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の火

【Zコード】

Z2323

【作者名】

鈴雪

【あらすじ】

これは狐火、エンジェルダストー一つの番外編のものです。二つの作品の設定資料も載せる予定ですのでよろしければ見に来てください。

新年あけましておめでとう！

「ほら、それ早く！」

「それこつちこつち！」

「君のは真ん中に置いて……」

「ねえこれどこ～？」

暗い闇の中で幾人もの人間がどたばと動き回っている。そして、しばらくすると音が途切れ……唐突に明るくなった。そこには袴や振袖を着込んだ空狐、舞、イヴはいつも通り空狐の頭の上、そして、ノエルとアルト、それから刹那に朱音、さらにハルに竜馬とはやなに香苗、アグニに月狐と銀狐が正座している。で、全員が一度大きく息を吸つい、

『新年あけましておめでとう』といいます！』

と全員がぴたりのタイミングで丁寧に頭を下げた。

場所は刹那邸の広めの部屋を襖を外して会場用に広げた部屋。そこに角松や獅子舞が飾られている。そして『2010年あめでとう』の垂れ幕。

その下にワンポイントとして、さり気なく空狐の『天月』やノエルの『蒼窮』がクロスして飾られている。

そう、今ここでは新年を祝うための催しがなされるのだ…

「ついに新年だね空狐くん！」

「ですね舞さん」

つきづき語るのは長く綺麗な黒髪の少女、舞。その横に座つていた少年、空狐も笑う。また新しい一年が始まるのだからつきしないわけがない。

「ママ、あけましておめでとう！」

「うん、あけましておめでとう。アルト

綺麗な金色の髪と紅い目の女の子、アルトの新年の挨拶に彼女の母親代わりであるノエルがにっこり笑いながら頭をなでる。若干ノ

エルの知るアルトよりも背が高いけどそこは華麗にスルーされるととなつた。

それを火きりに各々が「おめでとー」「よろしくー」と新年の挨拶を交し始めた。

それが一段落したところで即席の壇上に上がつた刹那と朱音がマイクを取り出すとみんなが注目する。

二人はペコッと頭を下げる。

「え、でわ、これより新年合同イベント『あけましておめでとう2010年！今年もよろしくの会』を開催します！」

パチパチと全員の拍手が鳴り響く。

「というわけで、まずは空狐アンドノエルによる新年の挨拶です！と突然の朱音の発言に、いきなり振られた一人が狼狽する。

「え……ちょ、ちょっと僕は聞いてないよそんなこと！？」

いきなり話を振られた灰色の髪と紅い目の中の少年、空狐が刹那に、

「そ、そうだよ！挨拶は朱音さんがするはずだつたよね。どうなつてるの！？」

アルトと同じ綺麗な長い金色の髪と透き通つた瑠璃色の目の女性、ノエルは朱音に詰め寄る。

「まあ、がんばれ。代表

「がんばってね。代表なんだから」

二人の返答に涙を流すノエルと空狐。たぶん、なに言つてもスル

ーされるのは目に見えている。

諦めてマイクを受け取つて台に上がる一人。なんとなく、そのすけた雰囲気がそつくりだつたりするのはご愛嬌。

「え、なんかわからないけどいきなり代表を押し付けられた、ノエル・テスターッサです。新年あけましておめでとうござります」

「木靈空狐です。新年あけましておめでとうございます」

壇上に上ると氣を取り直してペコッと頭を下げる一人。

「昨年は、みなさいいこと悪いこと色々な出来事がありましたと思ひます」

ノエルが朗々と語り、

「ですが、それでも楽しい一年でした。みなさんもそうだと考えて
います」

空狐が続く。

「まあ、堅苦しい挨拶は抜きにして……」

「ほんとノエルが咳払いする。」

『今日は大いに騒ぎましょー!』

突然押し付けられた割には息がぴつたりな一人だった。

『おーーー!!』

空狐とノエルの言葉に全員が歓声を上げた。さっそく、食事にありついたり、初めてあつた相手に自己紹介をしたりなどをしている。それを終えると用意されたご馳走にみんなの箸が伸びる。そこに、刹那が冴えない男性を壇上に上げて、

「雪さん今年の目標はなんですか?」

「えへ、することはきつちりとできるよつこじたいと……」
と、一年の抱負を言わせていたのだが、みんなぜんぜん注目してなかつたりする。

空狐も好物のいなり寿司を頬張つていたら。

「改めて初めて木靈空狐くん。アルトの母のノエル・テスター
ッサです。いつも娘がお世話になっています」

と、ノエルが微笑みながら空狐に話しかけてきた。彼女の着ているのは薄い水色で要所要所に花の模様があしらわれた振袖で、彼女の柔らかな雰囲気を際立たせている。

すっと彼女は空狐に手を差し出した。

「あつ、『一寧にありがとうござります。』これからもお世話になつています」

差し出された手を握つて、ぺこりと頭を下げる空狐。それからお互にお互いの顔をまじまじと見て、

(なんか他人の気がしない)

色々とシンパシーを感じていた。会つたばかりではあるが、二人

ともベクトルはちょっと違つが、わりと似たような属性をもつてゐるからなのかもしない。

「どーしたの空狐くん？」

訝しげに空狐の顔を覗き込む舞。

「いえ、何でもないです」

「振りを振る空狐。変に共感したこと話すのもちょっとあれだなと思つてそう答えたのだが、そこで朱音が、

「もしかして、ノエルに惚れた？」

ニヤリと笑いながらそんなことをのたまつた。

まあ、空狐には舞がいるわけだからそんなことはないのは朱音もわかつていたが、そこはお約束である。

「えっ！ そうなの空狐くん？！」

「ち、違うよ！ そんなことないってば！」

空狐は慌てて朱音の言葉を否定する。確かに綺麗な人だなとか、振袖の下から押し上げている豊かな胸に若干、目が行つてたのは否定できないのだが……

だが、そこにノエルの親友であるはやなが現れた。

「え～？ 君、ノエルに惚れちゃったの～？」

……その顔はほんのり赤く、息はアルコール臭かった。その手には空になつたグラス。そして、その後ろでにやりと笑う月狐。

「ちょ、はやなさんどうしたんだよ？！」

「ん～、なにがあ？」

とろんとした表情ではやなは返してからはやなが空狐に向き直る。絶対酔つてるよこの人と、空狐は引いていた。

「空狐君だけ～？ ノエルは止めといた方がいいよ～。今のところね～、告白した人をみ～んな振っちゃつてるからね～」
と面白そうにけらけら笑う。だけど、それからふと思案顔になつて、

「あ～、でも～、もしかしたら～ノエルの好みが、実はかわいい系だつたからとか？ なら君は合格なのかもね～」

なんとなく空狐と舞の間にあるものは察してはいるが、からかい
たい衝動を抑えもせずに爆弾を投下した。

少しだけ舞の田の中に、ノエルへの警戒の色が浮かぶ。

「ノエルちゃんってそうだつたんだあ」

香苗が驚いたように目を見開く。なお、彼女は地であるが、煽るような行為になってしまったのはいたしかたない。

「ち、違う！ 僕はそもそも……」

そして、彼女も慌てて否定するが、

「ほら、ノエル、いいちやえー」

いの間に左衛門に口にさりげなくやがて、左衛門からかく捕された。

バランスを崩し、ノエルは空狐の方に倒れ込む。慌てて支えようとする空狐だったのだが、

『うめら！？』

空狐もバランスを崩してしまった。床に倒れる一人。そして、その唇が……

僕は慌てて跳ね起きた。そして、そばに置いてあつた待機状態の蒼窮をブレード形態に戻し、周りを確認する。

ゆ、夢？ そうか、夢か……

まあそりやな。まだ夏の直前。新年はまだ半年先だしな。あー、
安心した。だって、男とキスするなんて耐えられん。たとえ女の子
みたいな相手だとしても！

「アーリー・アーリー...」
「おはようございます。」

『いかがしましたマスター?』

た。

「ああ、ごめんねアルト、蒼窮。ちょっと変な夢見ちゃつただけだ

から。もう少し寝てていいよ

「うんー」

『了解しました』

僕は蒼窮をペンドントに戻す。それから既そつうなマルトにタオルケットをかけ直して、そつと撫でてあげた。

にしても……リアルな夢だつたなあ。微かだけど最後の感触が脣に残つてるよ。はあ……僕、一応男だつたのになあ……もしかして、自分でも気づかなかつたけど、そつちの氣があつたのか？

そう考えた瞬間、ぶるりと背筋に寒気が走つた。うう、いやなこと考へてしまつた……

「わきやあ？！」

僕は跳ね起きた。耳も尻尾もぴーんと立つてしまつてゐる。慌てて周りを警戒。ここは……僕の部屋？ よ、よかつたあ。ただの夢かあ。まあ、よく考えると新年の挨拶なんてまだずっと先だよなあ。僕は頭頂部の耳をポリポリかく。

「どうしたのよ空狐、いきなり大声出して」

パタパタとイヴがベッドの脇の台の上に置いてあるイヴ用のベッド（最近買ったミニチュアのベッド）の上で体を起こして聞いてきた。

「ううん、なんでもない。変な夢を見ただけだから」

そう応えると途端に興味を無くしたのか、イヴはそつとだけ言ってまたパタンとベッドに潜り込んでやすやす寝息を立てながら眠り直す。

ふう、とため息をついて僕もベッドに潜り込む。

にしても、おかしな夢だつたなあ。明晰夢つてやつか？

なんか、ノエルさんだつたかな？ 彼女が倒れこんできた時の柔らかい感触とかしつかり残つてるし、最後のも微かだけど触れるか触れないかほどの……

考えたら恥ずかしくなつてきた。もう寝よ。

起きるとなんか舞さんのお嫌が悪かった。

いつも通りに見えるんだけど、長い付き合いでから機嫌がわるいのがよくわかる。

行動の端々でなにかに当たるような行動、特に僕の洗濯物を干すときなんか一瞬破けるんじやないかとはらはらするぐらいに。

「ま、舞さん？　どうしたの？」

で、ついに朝ごはんを食べてるとき聞いてみた。

なお、朝ごはんも、舞さんなら田玉焼きも綺麗な満月なはずなのに、無残に崩れ、「ご飯もちょっと茶碗からはみ出したりして」とる。

「ん~？　なんのことかなあ？」

にっこり笑ってるけど、その日は確実に、なんかわからないけど怒ってる？　いつたいどうしたんだよ舞さん！？

その日、僕は必要以上に気を使いながら生活することとなってしまったのだった。

新年あけましておめでとうございます。（後書き）

2010年あけましておめでとうございます。
今年もどうかよろしくお願いいたします。

あけましておめでとうございます！ 今年もどうかよろしくお願い
いたします。

あけましておめでとうございます！ 今年もどうかよろしくお願い
いたします。

あけましてぶつかやけトーク！　『狐火！』

空「いつも空狐です」

舞「じんにちは舞です！」

イヴ「みんなのアイドルイヴちゃんですよ～～！」

空「せーの」

空＆舞＆イヴ『あけましておめでとうございます～～』

空「ついに2011年だね舞さん」

舞「そうだね空狐くん。私たちのお話が始まつてもうすぐ二年経つんだね」

刹那（以下刹）「というわけで本日はぶつかやけトーク！」

イヴ「おーっと、いきなり刹那が乱入だあ～～。と、ここから実況解説は私イヴがお伝えします～～！」

空「うお～。刹那君どこから出でてきたのや～～？」

刹「そこの中管から」

空「君はマオか？」

刹「まー気にすんな。それよりこの世界の創造者からお題が出でるぜ？」

舞「創造者って？」

刹「じゃあ、お題発表！」

イヴ「懐からメモを出したけど、それがお題みたいね」

空「それに逃げたな。ところで朱音さんは？」

刹「エンドジーハルダストに出張してる」

空「ああ、ノエルさんのところね」

イヴ「彼女も大変ねえ。と、刹那がメモを開きました」

刹「実況しなくてもいいだろ？』。では、『狐火の最初の姿を語る』が今回のお題だ』

空「おっけー。つつじむのはもつ止めよつ」

舞「『狐火』つてだいぶ最初のプロジェクトから変わったよねえ」

空「（あつさり順応したな……）だね。元はこんな感じじゃなかつたね。原型はだいたい狐火スターの半年前に作られたんだつけ」
舞「空狐くんが里を離れるのは一緒だけど、行き倒れて私に拾われるつて内容だつたね」

空「で、行く場所ないから舞さんが僕に家が決まるまでいていいよつて言つてくれるストーリー」

刹「この時点ですでに俺は近所に住む人間だつたな。朱音いないけど」

イヴ「私もいないし、空狐も純粹な妖怪だつたしねえ、空狐が里を離れるのは確か『人と暮らしてみたい』っていう理由だつけ」

舞「一応数話分は書いたんだつけ」

刹「構想ではラストの部分もあるぞ。どういう経過かは分からないうが、途中で突然現れた魔王と戦つたりとか、めちゃくちゃな内容で、本人曰わく『なかつたことにしたい負の遺産』らしいな」

空「それがベースの僕らつて……」

イヴ「なにせ、魔法な世界なはずなのに電気あつたりするしね。まあ、某精霊のお話ではそういう力を電気に変換するつて設定あるけど、そういうのもなかつたしね」

刹「で、時間に余裕ができたから大幅に内容を作り直しで現在の形になると……」

舞「この時点で空狐くんは半妖で私の従兄弟つてなつたんだよね」

イヴ「二人の繋がりが薄かつたからその見直し。あと、ある設定の追加で空狐が半妖がよくなつたらしいよ」

刹「なんせ家に置いといた理由は「一人は寂しい」程度だからな。ある設定に関してはまだなにも言えないが、あいつ中間の存在が好きなんだよ」

イヴ「実は犬夜叉の影響もあつたりして……」

空「危ないこと言わないでよイヴ……ノエルさんといい確かに」

刹「あと、ボツになつたキャラ設定もいろいろあるな」

舞「へえ？ どんなの？」

刹「舞がかなり度の入ったヤンデレで、密かに空狐の周りに人間が近づかないよう裏工作してるとか。こう、『空狐くんは私のものだから、近づいたら容赦しないよ?』って女子に脅しをかけたりね」

舞「私そんな役だつたんだ……」

イヴ「まあ、嫌よねそういうキャラ。がっかりするのもわかるわ。ちなみにまだ色々あるわよ」

刹「空狐のシャツをこつそり押借して着てみたり、匂いを嗅いだりしては興奮するっていう危ない設定や、ゲームが異様に得意で、初めてプレイしたゲームで熟練の空狐を打ち破つたりとかな」

イヴ「ゲームですたぼろにされるって言うのは美狐編で流用、あと、銃捌きが異様にうまいのもこの設定から来てるわね」

舞「私って……」

空「二人ともとどめ刺さないで。うん、ちょっとそれは怖いけど、僕はたぶん大丈夫かな? 学校で一人はよくあつたし、そのくらいで嫌いになつたりしないよ」

舞「空狐くん……」

イヴ「なお、空狐は発情期の設定があつて、舞を襲うなんていう予定もあつたわね(ニヤリ)」

舞「え? く、空狐くんが私を……」

空「ちょっと待つて――――――――――ぼ、僕だってそんなの嫌だからね? できたらロマンチックに」

舞「え? あ、そんな……」

イヴ「さて、二人がいい感じに自分たちの世界に飛び立つ前に今後の話しね」

舞「あ、そうだね。空狐くん」

空「はい。狐火は今度こそ年内に完結させます。文化祭編が終わったら完結一直線です」

刹「ある程度、世界の根幹にかかる話しあるけど、結局設定活かしきれないんだよなあ」

空「言わないでよ……」

イヴ「私も残念ね。天月の秘密も私の秘密もほとんど明かされない
まだし……てか、空狐たちと魔王つていつ予定はどこにいつた
の？」

舞「まあまあ、それよりも、私たちの活躍をしっかり見てください
ねー。特に私はばんばん乱れ撃ちまくります！」

刹「んじゃ、今回はこのくらいか、じゃあみんな一緒に
一同『今年もどうかよろしくお願ひします！』

あけましてぶつかやけトーク！ エンジェルダスト

ノエル（以下ノ）「あけましておめでと＼＼ぞ＼＼まーす！」
アルト（以下ア）「まーす！」

朱音（以下朱）「というわけでこっちもお題があるよー」

アグニ（以下アグ）「こっちの意味がわからないが、お題？」

朱「うん、『エンジェルダスト』の裏話ね」

ノ「裏話？」

アグ「設定やらなんやらに影響を与えたものの話だな」

ノ「ふーん。例えば？」

朱「そうだね……機械天使は元々『ガメラ』から思いついたとか」

ノ「そうだったの？！」

アグ「説明しよう！　ここで言うガメラはもちろん平成版。古代アラントディスで生まれた災いであるギャオスに対抗するために生み出された地球の守護者である亀の怪獣だ」

朱「ええ、地球の守護神ガメラ。そこから文明の守護者機械天使ね。精霊炉もガメラのプラズマ炉が元ネタ。あれもマナからエネルギー変換するから」

朱「あれは名作だねえ。そこからKOS-MOSや仮面ライダーやらを元に設定を練つたみたいだよ。圭一が特異能力者だったのも、アギトが特殊な力を持つ人間から進化したってことから来てるみたいだし」

アグ「KOS-MOSはゼノサーラガのメインキャラ。ヴェクター・インダストリー製の最新型アンドロイド。レアリエンという人造人間が主流の世界だから、完全な機械の彼女はかなり珍しい存在で、作品の根幹にも関わってる。ちなみにあだ名は邪神モツコス」

ノ「僕、怪獣が元だつたんだ……」

朱「武装を転送はKOS-MOSからね。他にも明らかに仮面ライダーってわかる部分あるわね。『エクシードライブ』なんて55

5とWの必殺技の切り張りだし。空断・煌きもキックを剣に置き換えたつて感じかしら」

アグ「敵であるヴェノムはレギオンやBETA、フェストウムをして水増ししてから割つたような感じだとさ……どこにフェストウムの要素があるかは全くわからんが」

朱「たぶん、群体で存在するってことでしょう？　本人曰わく『インディペンデンスデイ』の異星人もイメージソースだって」「もう訳がわかんないね……」

アグ「こんなこあともあろうかと調べといたぞ！　レギオンは『ガメラ2』の敵だったケイ素生命体のこと。フェステウムはアニメ『蒼穹のファフナー』に出てきたケイ素生命体。読心能力と他者と同化する力で人類を脅かした。BETAはゲーム『マブラヴ』に登場した侵略者。突然地球に侵攻ってきて、人類を崖っぷちに追い詰めてる。『インディペンデンスデイ』はアメリカのSF映画。エイリアンによる侵略に立ち向かう人間の話だ。どれもあいつのお気に入りだな」

ノ「そういう意味じゃないんだけどなあ。あと、なんかくどい気がするよ」

アグ「『説明しよう！』と『こんなことあるかと』は男の、そして科学者の口マンだぞ！！」

朱「確かに、ヤッターマンのおしおきだベーや、宇宙戦艦ヤマトの真田さんのあのセリフは印象深いわね。刹那（朱音の幼馴染の夫）も放送当時、言ってみたって言ってたし」

ノ「宇宙戦艦ヤマトが放送してる世代ってことは……」

朱「ノエル、なにか言い残すことある？」

ノ「い、いえ、なんでもありません！！」

アグ「例の小型種は言ってみればミヨルニア（マスター型フェストウム）の立ち位置のつもりらしい」

ノ「それってつまり、元人間じゃないの？」

アグ「いや、ようするに種からの独立個体と言いたいみたいだ。ち

ねみにミヨルニアは『蒼穹のファフナー』の敵対生命体フェステウムのマスター型と呼ばれる存在。かつて主人公真壁一騎の母、紅音と同化したことで、終盤で『人類との共存』という意思を継ぐ存在になり一騎たちに協力したんだ」

朱「ついでに言うと、ノエルが武器を取り込むことで強化するなんても考えていたみたいだね」

ノ「僕ってマークザインだつたの？！」

アグ「ちなみにマークザインは『蒼穹のファフナー』の二代目主人公機。『一人でも多くの兵士を生き残らせる』という思想の基で開発された。主に武器と同化することで飛躍的にその力を向上させる能力やフェステウムも逆に同化させることもできたりする」

ア「ママ」

ノ「なに？」

ア「ママにも26の秘密があるの？」

ノ「いや、流石にそれはないかなあ……ってアルト、どこでそんなの覚えたの？」

ア「おじちゃんが教えてくれた」

ノ「そうなんだ……」

アグ「26の秘密は仮面ライダーV3からだな。でも、本編で26全部出てないんだよなあ」

朱「余談だけどストーリーも元は仮面ライダーに近い展開を考えていたみたい」

ノ「へえ、どんなの？」

朱「ノエルは神無とは違う組織に拉致されて改造手術を施されるんだけど、失敗作として廃棄処分されるはずだった。だけど、その寸前に脱走に成功して、神無に保護されるって感じ」

アグ「そこから改造手術をした組織に復讐するために戦うって内容だな。アルトは実験で生み出されたノエルのクローンで、朱音は直属の上司だったな」

朱「で、ノエルの製作データから作られた人造人間たちと戦うと…」

…割とダークな内容だつたわねー」

ノ「確かに……いや、今のもコメティ入つてるけど実は所々で、倫理に反する部分があるんですが……」

朱「そうね、ノエルが狂人なのはどっちもだし」

ノ「僕つてそんな扱い?！」

アグ「一応『冷静に狂つてる人間』が設計コンセプトらしい」

ノ「僕つて……」

朱「さて、暗い話は置いといて、他にもおもしろい話をしましそうか。まずノエルの名前」

ア「ママのお名前?」

朱「うん、ノエル、君の名前の意味はわかる?」

ノ「ラテン語で『誕生』ですよね?」

朱「うん。でもその名前には他にも意図があつたんだよ」

ア「えつ? お姉ちゃんどんなの?」

朱「ガブリエル、ウリエル、ラファエル、ミカエル……天使つてみたい名前の末尾に『エル』がつくでしょ?」

ノ「あ」

朱「で、ノエルは『N O + E L』……末尾に天使を表すエルが付いてるの」

ノ「そうだったのか!」

朱「やっぱ氣づいてなかつたのね。ちなみにエルはヘブライ語で『神』を意味する言葉。天使が神に近しいものってことね」

アグ「まあ、ノエルの名前はある種の皮肉もあるな」

ノ「皮肉?」

朱「それはそのうち語るわ。ついでに剣の名前が『蒼穹』なのは天使が飛ぶなら綺麗な空がいいんじゃないから」

蒼穹「余談ですが、登場するはずだった私の仲間の神剣も『空』に関する名前の予定でした」

朱「そこら辺は『狐火!』の空狐と舞の武器が『月』を名前に入れてるのと同じ理由ね」

アグ「ちょっとした関係もあるが、これは両のストーリーが進めば
わかつてくる……はずだ」

ノ「曖昧だなあ

蒼穹「私も兄弟たちに会いたいです……」

朱「なお、狐火にはアルトや私が出てますが、エンジエルダストか
ら十一年後の姿となっています」

ア「えー、アルト小せい……ママみたいなほんきゅほんじやないの
ー？」

朱「残念だけど、そういうじゃないのよね」

ノ「いや、その言葉、……いや、いいや。後でしめとこ

アグ「じゃあ、今回せこひりにしておへか

ノ「それでは……」

一同『みなさん、今年もよろしくお願ひいたします』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323j/>

天使の火

2011年3月27日20時11分発行